



南部弁の就活生と津軽弁の面接官のコミカルなやりとりを描いた「面接室」
=2018年3月、八戸市の「はっち」

高校を卒業した後も演劇を続けたいという若者の受け皿に―との思いから、2017年4月、八戸学院大演劇部は設立された。部長は、部長で2年の高坂大誠さん(20)と3年長谷川華さん(21)の2人と少ないながらも、それぞれ青森県南地方のさまざまな舞台に出演し、爪痕を残そうと懸命だ。



■ scene 7

少人数でも存在感発揮

担い手への期待集まる

八戸学院大演劇部



発声練習をする高坂大誠さん(左)と長谷川華さん=2月28日、八戸学院大

され、文化部では唯一、2人による芝居だった。大学側からのバックアップを受けられる「強化指定部」に選ばれている。高坂さん、長谷川さん、いずれも設立当初から所属。18年3月、はちのへ演劇祭での旗揚げ公演も

担い手への期待集まる
「オーディオドラマやアニメーションに興味があり、

理由を語る。

「舞台の経験が足りない」と意欲を燃やしている。深浦町出身の長谷川さんは初代部長だ。県立五所川原高時代も演劇を経験してきたが、八戸では南部弁を使った作品も多く、体に染み付いた津軽弁が邪魔をして苦戦することもあった。それでも、「普段使わない言葉で話す貴重な機会」と前向きに取り組んだ。

18年9月に八戸市の演劇ユニット「まぐねつとcom」の自主公演「暴走シュリエット」と、10月に南郷アートプロジェクトの一環で上演された「くじらむら」で主演。八戸の演劇界に欠かせない存在となりつつある。現在、部長を高坂さんに譲った長谷川さんは、八戸で就職活動中だ。演劇ができる環境や仲間はもちろん、三社大祭やえんぶりなど地元文化・風土にも魅力を感じているからだという。

以前は声優になるため独学で芝居を勉強。これを耳にした大学側の誘いを受け、創部メンバーに名を連ねることになった。「舞台に立つ」というもどろろ自分が見えるような気がする。料理人の見習いから就職活動中の大学生、はたまた宮沢賢治まで、さまざまな役柄に挑戦し、演技の面白さを実感しているようだ。「部員を増やし、単独公演をやりたい」と意欲を燃やしている。

県南では30代以上が中心となっている劇団が多いが、若い世代にも担い手としての期待が集まる。長谷川さんは「今は役者だけでなく俳優としての側にもなりたい」と、やる気は十分だ。「舞台の経験を夢に近づけたい」「地元の演劇を支えたい」と、そんな強い思いと共に立つ舞台、県南の演劇文化を担う若手は着実に育っているように思われる。

(小林彩乃)